

2-P-13

「高齢者健康体操」に参加している地域在住高齢者の現状と継続参加を可能にする要因の検討

谷口由佳

近藤裕子 有田弥棋子 長尾厚子 大串美沙

本研究は、「高齢者健康体操」(以下、健康体操)に参加している地域在住高齢者の現状を把握し、その継続参加を可能にする要因を検討することを目的とした。健康体操に1年以上継続参加している高齢者53名(全員女性、年齢77.4±5.1歳、継続年数6.9±4.2年)を対象とし、身体的機能(握力、上体おこし、長座体前屈、開眼片足立ち、椅子すわり、5m最大歩行速度)及び精神・心理的機能(MMSE、GDS15)、社会的機能(LSNS-6)、身体活動量(1週間の歩数)、生活機能(老研式活動能力指標)、QOL(改訂版PGCモラル尺度)を測定し、その結果を継続年数別(1年以上5年未満、5年以上10年未満、10年以上)に比較検討した。さらに、参加の動機や感じている効果等について、フォーカスグループへの半構造化面接を実施し、健康体操への継続参加を可能にする要因を質的に分析した。その結果、身体及び精神・心理的機能については継続年数による差異は殆どみられなかったが、社会的機能については継続年数が長い高齢者ほど、LSNS-6が高値を示していた。高齢者にとって、健康体操への参加は社会的ネットワークを構築する機会となっており、同年代の気の合う者同士の交流といった楽しみが継続参加を可能にしていると考えられた。また、高齢者は健康体操に対し、身体的機能の向上というよりは、むしろ維持を期待しており、年齢や体力に合った内容であることが、継続参加を可能にする鍵となっていることも分かった。

2-P-14

英語絵本を導入した初等英語教育教員養成プログラム開発に関する研究

脇本聡美

本研究は、キーラン・イーガンの提唱する感情や想像力に働きかける教育方法論(Imaginative Approach, 以下IA)に基づいて、初等英語教員養成のプログラムを開発することを目指している。教員を志望する学生が、「話しことば」として学ぶ英語学習の方法と概念についての理解を深めることを目指すプログラムの開発は、今後の教員養成課程、および、小学校での英語教育を充実させていくために有効であると思われる。

イーガンの理論をもとに、初等教育教員養成課程の英語授業において、英語絵本を使い、学生が児童に対する英語教育(Teaching English to young learners, 以下TEYL)について理解を深め、認知的道具を活用することを目指す授業をデザインする。デザインした授業の有効性を検討するために、学生たちの授業中のディスカッションの会話、活動後の学生のリフレクションをデータとし、その質的分析を通し、学生がTEYLにおけるIAとその概念を理解したかを明らかにすることを目指した。

分析結果から、学生のグループによって認知的道具の使用の多様性が様々であることが明らかになった。ディスカッションの中で言及された認知的道具の多様性は、模擬授業として、彼らが創作した絵本を使った活動にも反映されていた。一方、イーガンの提唱する「想像力」の理解については、日常的な理解の域を出ておらず、今後の授業改善が必要であることが示された。